

# 障害者福祉現場における従事者のメンタルヘルスに関する基礎的研究

—ストレス・コーピングの年代差と職階差に注目して—

深谷 弘和\*  
山本 耕平\*\*  
大岡 由佳\*\*\*  
峰島 厚\*\*

現在までに職場のメンタルヘルスに関する調査・研究は多くあるものの、障害者福祉現場に限った調査・研究は少ない。今回、障害者福祉現場の福祉従事者に対する質問紙調査を実施し、1173名（回収率52.9%）から回答を得た。その結果の中から本稿では、従事者のストレス・コーピングの年代差と職階差に注目して分析し、考察した。分析は、コーピング尺度であるBSCPの結果と質問紙に独自に設置したコーピングの自由記述を基に、量的・質的の両面からおこなった。量的結果からは、BSCPの尺度で年代差・職階差それぞれで有意差な差があった。特に若い世代は比較的に様々なコーピングを選択し、一方で50代は発想転換を積極的に選択していた。質的結果では、量的結果を基に分析し、従事者のコーピングプロセスを仮説的に検討した。ここから、50代、また管理職は若い世代に比べてシンプルなプロセスを辿っていることが想定された。またコーピングをはじめとして、従事者のメンタルヘルスは近年の福祉労働環境の変化が強く影響しており、今後のさらなる検討の必要性が明らかになった。

キーワード：ストレス、コーピング、障害者福祉、メンタルヘルス、福祉労働

## はじめに

職場メンタルヘルスの問題は、現代の社会問題のひとつとなっており、中でも、看護師や教師、そしてソーシャルワーカーなどの対人援助

職のメンタルヘルスに関する調査および研究はこれまでも多く実施されている。社会福祉従事者を対象にして、2008年に全国社会福祉協議会が実施した調査<sup>1)</sup>によると、福祉従事者の離職者のうち約15%が身体またメンタルの体調不良を理由に離職している。福祉従事者のメンタルヘルスに関する研究をおこなうことは、今後の福祉労働を確立する上で重要なものとなる。しかし、社会福祉従事者の中でも障害者福祉現場で働く従事者に焦点を当てたものは少ない。

\*立命館大学大学院社会学研究科博士前期課程

\*\*立命館大学産業社会学部教授

\*\*\*武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科講師

そこで、今回、障害者福祉現場の従事者を対象としたメンタルヘルスに関する量的調査を実施した。この量的結果については調査報告書<sup>2)</sup>に詳しいが、ここでは、対象者の年代・職階によってメンタルヘルスの不全状態に有意な差があったことが明らかにされている。本稿では、その結果を受けて、従事者のストレス対処であるストレス・コーピングの年代差と職階差に注目して分析をおこなった。さらにその量的分析によって浮かび上がってきた結果から、さらに詳しく具体的なコーピング実態を把握するためコーピングに関する自由記述を質的に分析した。

このように本稿では、量的調査によって全体の傾向を把握し、新たに生じた問題設定から質的分析を行うことにより、より明確に障害者福祉現場における従事者のコーピングプロセスを仮説的に検証することを目的とする。

## I 福祉現場におけるメンタルヘルス研究

### 1. 対人援助職のバーンアウト研究

職場におけるメンタルヘルス研究は多く存在しているが、特に対人援助職については他の職に比べてストレスが多いことが、これまでもバーンアウト（燃えつき症候群）研究を中心として指摘されている（Maslach & Jackson, 1981; 田尾, 1984; 久保・田尾, 1996）。

バーンアウト問題は、米国で1970年代より対人援助職の登場とともに、増加してきた問題であり<sup>3)</sup>、わが国においても1980年代から教師や看護師を対象としてバーンアウト研究が展開されるようになってきた。バーンアウトは精神科医であった Freudenberger (1974) によって「スタッフがエネルギーや体力、知力を過度に使用することを要求された結果、疲れ果て、機

能不全に陥ること」と定義され、日本におけるバーンアウト研究の展開については、落合 (2003; 2009) が教師と精神科看護師を対象とした研究を詳しく整理している<sup>4)</sup>。同じ対人援助職の中でも、看護師や教師などに比べて社会福祉従事者に対する研究はこれまであまりおこなわれてこなかったが、2000年代に入り、ソーシャルワーカーを対象としたバーンアウト研究を中心にその研究は増え始めている（植戸, 2000; 藤野, 2001; 清水ら, 2002など）。

### 2. 対人援助職のコーピング研究

ストレス・コーピングの研究としては、Lazarus & Folkman (1984) の研究が基礎的な位置を占める。彼らは心理的ストレスモデルを構築し、コーピングを大きく「問題焦点型 (problem-focused) 対処行動」と「情緒焦点型 (emotion-focused) 対処行動」の2つに分類している。そしてコーピングを「能力や技能を使いはたしてしまうと判断され自分の力だけではどうすることもできないとみなされるような、特定の環境からの矯正と自分自身の内部からの強制の双方を、あるいはいずれか一方を、適切に処理し統制していこうとしてなされる、絶えず変化していく認知的努力と行動による努力<sup>5)</sup>」とし、コーピングの分析によって、ストレスと個人の関係性を明らかにできるとしている。この分類を中心にして、コーピングに関しては対人援助に限らず、ストレス研究全般の問題としてこれまでに研究が積み上げられてきている。中でも対人援助職とコーピングという点では、久保・田尾 (1996) が看護師のバーンアウト研究を行うなかで、Lazarus & Folkman を整理し、バーンアウトとコーピングの関連を強調している<sup>6)</sup>。

このように、これらソーシャルワーカーを対象とした調査に比べて障害者福祉従事者に対しては、バーンアウトやコーピングといったメンタルヘルスに関する研究が少ない。特に対人援助職のメンタルヘルスに関する研究という意味では、全体的にバーンアウト研究に偏り、「燃えつき」以外のメンタルヘルス問題に焦点があまり当てられていない。そして、とりわけストレス対処行動であるコーピングについての検討はほとんどされていない。

## II 調査概要と方法

### 1. 対象および方法

大阪府と京都府のきょうされん（旧共同作業所連絡会）に加盟している16法人より2218名の福祉従事者を対象とし、2010年2月より1ヶ月間アンケート調査票を配布し、男性462名、女性678名、計1173名（回収率52.9%）の従事者から回答を得た。アンケート調査は記載者のプライバシーに十分な配慮をおこない、記載者が他の影響を強く受けないよう留め置き調査法および無記名調査法を採用した。

質問紙調査の実施にあたっては、NPO 法人大阪障害者センターが2009年6月より「福祉現場におけるメンタルヘルス検討会」を立ち上げ、研究者と障害者福祉現場の従事者が、調査にあたっての検討を加え、また職階に分けての半構造化面接によるグループインタビューを予備的調査として実施した。この予備的調査をもとに質問紙を作成し、各法人の管理職に対して調査説明会を実施している。

### 2. 使用尺度

今回使用した質問紙は、予備的調査に基づき

属性といくつかの尺度を使用した。本稿において分析に用いた尺度は以下に示す2つの尺度である。

まずコーピングを測定する尺度として「コーピング特性簡易尺度（BSCP）」を用いた。BSCP（the Brief Scales for Coping Profile）は影山ら（2004）が開発した18項目6尺度から構成されている尺度である。6尺度はそれぞれ「積極的問題解決」、「問題解決のための相談」、「気分転換」、「他者を巻き込んだ情動発散（以下：情動対処）」、「回避と抑制（以下：感情抑圧）」、「視点（発想）の転換（以下：発想転換）」である。BSCPは他のストレス・コーピング尺度に比べて質問項目が少なく、メンタルヘルスに応用するために信頼性・妥当性が検討されている尺度である。

次に従事者の精神的健康を測定する尺度として、「精神健康調査票28項目版（GHQ-28）」を用いた。GHQ28（General Health Questionnaire 28 items）では、福西（1990）のcut off pointを採用し、7点以上を高得点群と設定した。なお、本稿では、GHQ28において高得点群に位置した者をGHQ高リスク者として分析をおこなった。

また、今回の質問紙にはBSCPの質問項目の後に、「あなたが職場のことで困ったり、悩んだりした時に、実際に役立ったことを具体的に挙げてください。（3つまで）」という設問で自由記述欄を設定した。これは、コーピングに関する分析を行う時、本人のおかれている状況に対して、いかなる思いを持つかを分析することが重要であると考えたためである。

### 3. 統計処理

統計的検定にはクロス表分析では $\chi^2$ 検定を

施行し、一元配置分析では Bonferoni 検定を施行した。SPSS17.0 for windows を使用し、有意水準は 5 % を採用した。

#### 4. 質的データ処理

今回の質問紙には BSCP の質問項目の後に「あなたが職場のことで困ったり、悩んだりした時に、実際に役立ったことを具体的にあげてください。(3つまで)」という自由記述項目を設置し、最大3つまで記述できるようにした。本稿では、この BSCP の後に設定したコーピングに関する自由記述欄を質的に分析した。

分析には修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (以下 M-GTA) を参考にした。木下 (2003) は M-GTA に適した研究として 3 点挙げている。1 点目は、人間と人間が直接的にやり取りをする社会的相互作用に関わる研究であること。2 点目は、ヒューマン・サービス領域であること。3 点目は研究対象とする現象がプロセスの性格をもっていることである。本稿は、障害者福祉従事者が、職場で対人関係を含むストレスをどのように対処しているのかを明らかにするものであり、特にそのコーピングは Lazarus & Folkman (1984) が指摘するようにプロセスとして捉えることが重要である。M-GTA はインタビュー内容を分析する方法ではあるが、質的データとしての自由記述の明確な分析方法が確立されていない中で、ストレス・コーピングの自由記述分析に M-GTA を参考にすることは有用であると考えた。

M-GTA の分析プロセスとしては、分析テーマと分析焦点者を設定し、分析のための分析ワークシートを作成する。その後、概念間の関係性を検討するものである。本稿では、分析テーマとして「障害者福祉従事者の年代・職階別の

ストレス・コーピングのプロセス」とし、分析焦点者を「自由記述欄に記入した20～50代職員および管理職・中間管理職・非管理職」として、コーピングプロセスの年代・職階による違いを検討することを目的とした。具体的には、BSCP の 6 尺度である「積極的問題解決」、「問題解決のための相談」、「気分転換」、「情動対処」、「感情抑圧」、「発想転換」を概念に据え、今回得られた823件の自由記述を概念ごとにカテゴリ化して整理した。さらにそこから概念間の関係性を検討した。検討は自由記述という対象者が限られたデータのため、仮説的にコーピングプロセスを仮説的に生成することに留めた。

#### 5. 倫理的配慮

今回、実施した質問紙調査は無記名回答とし、記入者のプライバシーが尊重されるように、質問紙の配布は管理職がおこなうものの、質問紙の提出はそれぞれ個々の判断でおこなえるよう配慮をおこなった。また大学の倫理審査委員会審査の上で質問紙調査を実施した。

### Ⅲ 量的データ結果

#### 1. 基本属性

回収した1173名の有効回答者の基本属性を Fig. 1 に示す。まず、性別は、男性が39.4%、女性が57.8%だった。年齢分布は、20代が240名(23%)、30代が296名(29%)、40代が250名(24%)、50代以上が251名(29%)で平均的にはらついていた。職階については管理職と中間管理職で合わせて26.5%と約4分の1が管理職についていた。

		n	%
性別	男性	462	39.4
	女性	678	57.8
年齢	20-29 歳	240	23.1
	30-39 歳	296	28.5
	40-49 歳	250	24.1
	50 歳以上	251	24.2
職階	管理職	108	9.5
	中間管理職	194	17
	管理職ではない	837	73.5

Fig. 1 基本属性

## 2. BSCP の平均値

BSCP は、積極的問題解決：8.97点、問題解決のための相談：8.17点、気分転換：7.56点、情動対処：4.27点、感情抑圧：6.00点、発想転換：7.45点であった。BSCP には他のコーピング尺度と同じように、尺度を図る基準となる値は設定されていない。ただし、精神科病棟看護

従事者を対象とした前田ら（2005）の調査では、BSCP は、積極的問題解決：9.0点、問題解決のための相談：9.0点、気分転換：8.1点、情動対処：4.2点、感情抑圧：5.9点、視点の転換：7.6点であった。この前田らの調査と比較すると、大きくは類似しているものの問題解決のための相談が、精神科病棟看護従事者に比べて、今回の障害者福祉現場の福祉従事者の方が低い値をしめしている。この点については後述する。

## 3. GHQ28にみるストレス状態の年代・職階差

はじめに述べたように、今回の調査では、メンタルヘルスの状態を図る尺度である GHQ28 で年代と職階で有意な差が生まれた。まず年代とのかかわりに注目してみると、Fig. 2 に示すように、20代、30代、40代で高リスク者の数が低リスク者を上回っていた。一方で50代は低リスク者の数が高リスク者の数を上回っていた。次に、職階の結果を Fig. 3 に示す。ここでも、

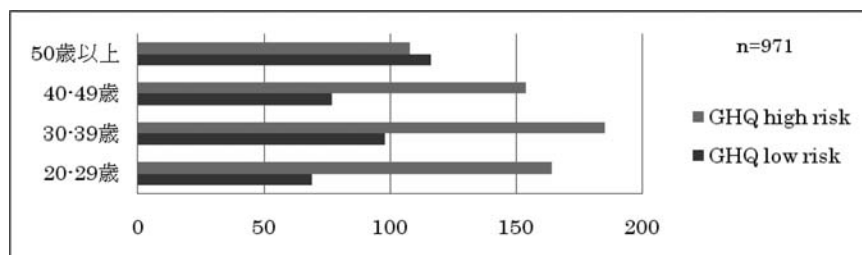


Fig. 2 年代別の GHQ 高リスク者と低リスク者

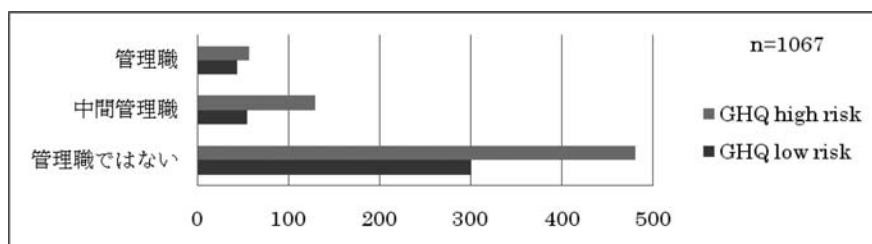


Fig. 3 職階別の GHQ 高リスク者と低リスク者

管理職は、中間管理職、管理職でない人たちに比べて、高リスク者と低リスク者の差が小さいことがわかる。

このようにGHQ28による検討から、年代・職階によって、メンタルヘルス状態に差があることがわかる。よって、メンタルヘルスに関わるストレスをどのように対処するかというコーピングのあり方も年代によって差が生じるのではないかとし、コーピング分析をおこなった。

#### 4. BSCPの平均値と年代および職階の比較

次に、BSCPの平均を年代と職階との比較にみる。

まず、Fig. 4, Fig. 5に示すように年代との比較では、「問題解決のための相談」、「気分転換」、「情動対処」、「感情抑圧」、「発想転換」でそれぞれ有意な差があった。問題解決のための相談は若い世代ほど高い値を示しているが、50代以上は相談相手がないのか、本人が必要としていないのか問題解決のための相談の値は著しく低い。気分転換では、20代が高い値をしめしており、趣味や娯楽等で気分転換を若い世代は積極的におこなっているといえる。情動対処では、20代、30代、40代共に高いが、50代では情動対処の値は低い値を示している。感情抑圧では、20-30代が同程度に高く、30代、40代とそ

	20-29歳 (n=240)	30-39歳 (n=296)	40-49歳 (n=250)	50歳以上 (n=251)	
BSCP - 積極的問題解決	8.72	9.09	9.10	8.90	ns
BSCP - 問題解決のための相談	8.12	8.34	8.44	7.66	***
BSCP - 気分転換	8.51	7.41	7.04	7.16	***
BSCP - 情動対処	4.40	4.45	4.48	3.89	***
BSCP - 感情抑圧	6.22	6.28	5.94	5.50	***
BSCP - 発想転換	7.08	7.22	7.59	7.73	***

Fig. 4 BSCP 平均値×年代 (10歳刻み)

\*\*\* p<0.01 \*\* p<0.05

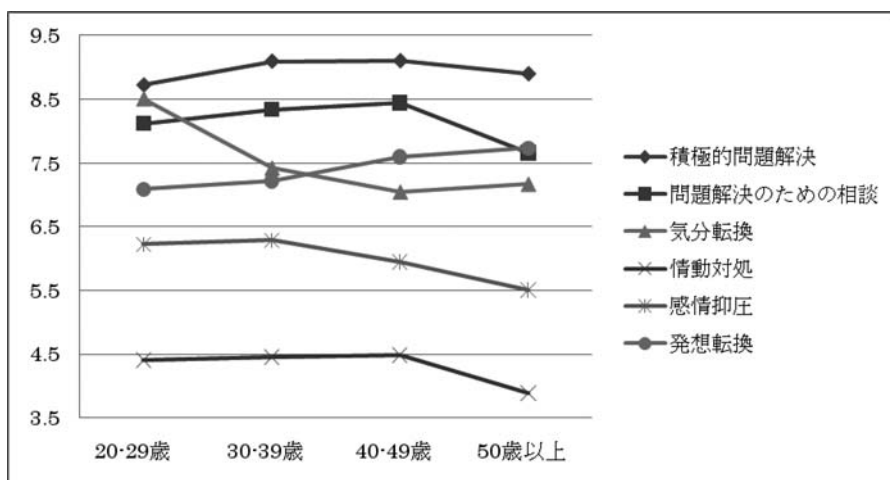


Fig. 5 グラフ① (BSCP 平均値×年代)



の値は低くなっていた。

次に Fig. 6, Fig. 7 に示すように職階との比較をみると、「感情抑圧」以外で有意な差がみられた。積極的問題解決では、管理職や中間管理職といった何らかの職階にあるものが、個人で問題解決ができていることがわかる。問題解決のための相談においても積極的問題解決と同様、何らかの職階にあるほうが相談できている。気分転換は、管理職でないと気分転換ができている。情動対処は、中間管理職が高い値を

示している。Ⅲ-3 でみたように中間管理職は高いストレス状態にあったが、それを他人の責任にしたりすることでの発散をおこなっている傾向にあることがわかる。感情抑圧に有意差はないものの、これも情動対処と同様、中間管理職が高い値を示し、感じているストレスを抑圧的に処理していることがわかる。発想の転換は、年代と同じく職階が上がると高くなる傾向にあった。

	管理職 (n=108)	中間管理職 (n=194)	管理職ではない (n=837)	
BSCP - 積極的問題解決	9.69	9.36	8.79	***
BSCP - 問題解決のための相談	8.85	8.35	8.04	***
BSCP - 気分転換	6.89	7.39	7.69	**
BSCP - 情動対処	4.39	4.56	4.20	**
BSCP - 感情抑圧	5.98	6.22	5.97	ns
BSCP - 発想転換	8.03	7.40	7.40	**

Fig. 6 BSCP 平均値×職階

\*\*\* p<0.01 \*\* p<0.05

※管理職 = 施設長・サービス管理責任者・事務長・法人常務など  
 中間管理職 = 副施設長・主任・班長など

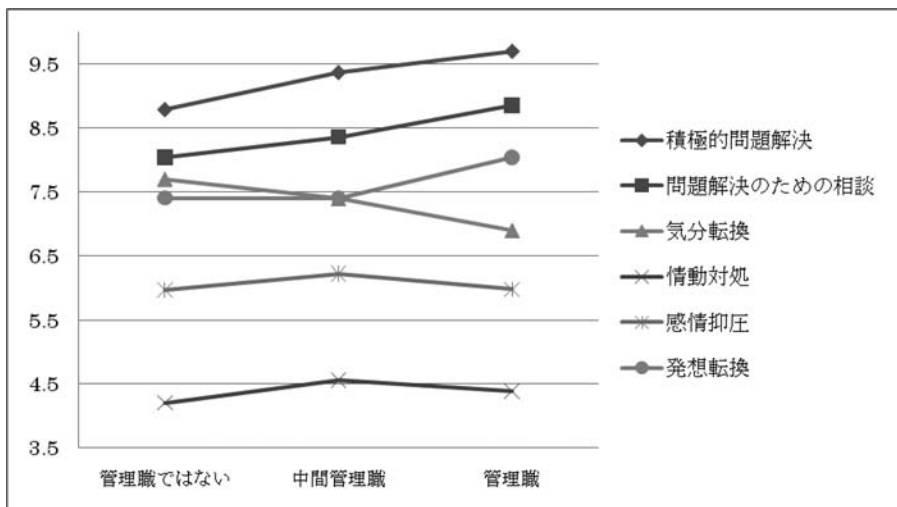


Fig. 7 グラフ② (BSCP 平均値×職階)

#### Ⅳ 質的データ（自由記述）結果

ここまでBSCPの結果から年代・職階との関わりを量的結果として示してきた。この量的結果を受けて、BSCPにおける質的項目の最後に設置した自由記述の結果を示す。Ⅱ-4でも記したように自由記述はM-GTAを参考にして、BSCP 6尺度を概念に据えて、分類した。特に量的結果ではBSCP 6尺度と年代・職階との間にはそれぞれに何らかの有意な差がみられたため、有意な差のあったコーピングが具体的にはどのような内容になっているのかを質的に明らかにする。また、本研究の目的である障害者福祉現場における従事者のコーピングプロセスを明らかにするためには、従事者がおこなっているストレス状況に対して、いかなる思いを持ち、ストレス対処行動をおこなうのかをBSCPの尺度に基づいて具体的にみていく必要がある。以下その結果を示す。

##### 1. 自由記述と年代

まず、ストレス・コーピングにおける自由記述の年代との関連について示していく。量的結果では、Ⅲ-4でみたようにBSCP 6尺度のうち特に問題解決のための相談、気分転換、感情抑圧、情動発散、発想転換と年代との間で有意な差がみられた。

自由記述におき、従事者が問題解決のための相談を誰に対しておこなっているのかをみる。20代では「上司に相談する」や「職場の先輩に相談し、アドバイスをもらう」といった上司、先輩に相談するものが多くみられ、また「友達に話を聞いてもらう」など友人に対して相談しているという記述が他の年代に比べて多かっ

た。一方で30代では、「同僚や自分の家族に相談し、アドバイスをもらう」や「同僚に相談する」という記述のように、同僚や家族に対して相談しているという記述が多くみられた。40代、50代は量的結果にみられたのと同様に、相談をコーピングとしておこなっているとする記述が少なかった。

次に、20代は他の年代に比べて気分転換をおこなっている傾向がみられた。このため、自由記述において気分転換がどのようになされるかをみた。そこでは「プライベートはできるだけ忘れるように遊んで気分転換する」、「友人に連れだされ、休日に遊んで仕事以外のことに目を向けた」そして「趣味に費やす」など、友人と遊びに出かける、趣味に時間を費やしているという記述が多くみられた。一方、その20代に比べて50代は気分転換の記述は少なく、友人と出かけるという記述はみられなかった。

次に情動対処は、量的結果と同様に自由記述も少なかったが、30代で「友達に愚痴をこぼす」、「家族に相談する。八つ当たりする」などの情動対処とみられる自由記述が他の年代に比べて多かった。

最後に発想転換は、量的結果では、年代が上がるにつれて値が上がっていた。これを自由記述にみると、50代では他の年代に比べて発想転換の自由記述が多くみられた。具体的には「相手の立場や家族の立場になって考え直してみる」、「自分の悪いところを治そうと努力し、相手のいいところを認める」などがあった。

##### 2. 自由記述と職階

では、量的結果を踏まえて、自由記述からの職階との関連みていく。量的結果では、Ⅲ-4でみたように積極的問題解決、問題解決のため



の相談、気分転換、感情抑圧、発想転換と職階との間で有意な差がみられていた。

この積極的問題解決を職階間で、どのような差が生じているのかを質的にみると、中間管理職と管理職は、「問題・課題を職員集団で共有する。解決を図る」や「職員間の中で話題にしてそれぞれの見方を話し合ったりする」など、職員集団の中にストレスの要因となっている問題を提示することで解決を図ろうとしている記述がみられた。一方で管理職でない従事者は「仕事に関連する本を読む」などによって解決を目指そうとする記述が多かった。

問題解決のための相談では、誰に対して相談をしているかを自由記述から分類してみると、中間管理職、管理職でない従事者は「同僚に相談する」や「上司に相談する」といった記述が多くみられた。一方で管理職は、「職場外の人と話し、相談した」、「他施設の管理職と話す」という記述がみられた。

次に気分転換では、年代差と同様の傾向が職階差の自由記述でもみられた。管理職は他に比べ、気分転換に関する自由記述の割合が少なかった。

情動対処は、量的結果において中間管理職が他に比べて高い値を示していた。自由記述でみられた中間管理職の自由記述としては「他人にグチを言う」、「夫に愚痴を言う」といった家族や他人に対して愚痴をいうことで対処している記述がみられた。

最後に発想転換は、量的結果では、管理職が高い値をとっており、積極的に発想転換をおこなっていることがみられ、その中で自由記述では「前向きに考える」、「時間をおいて冷静に考える」といった記述があったが、中間管理職や管理職でない従事者でも同様の内容が記述され

ており、発想転換の内容には差がなかった。

## V 考察

### 1. 障害者福祉従事者のストレス・コーピング

Ⅲ-2 でみたように今回の調査の BSCP の各尺度の平均値を、前田ら（2005）が看護師に対しておこなったものと比較してみると、問題解決のための相談と気分転換で低い値をとっていた。ここには近年指摘されている障害者福祉現場の労働条件の変化がその背景にあると考えられる。わが国で1990年代の社会福祉基礎構造改革にはじまり、2006年に施行された障害者自立支援法などの法・制度の展開によって、障害者だけでなく、関わる従事者の環境も同時に変化している。例えば、施設利用者との契約制度への移行などは、従事者の書類作成といった事務量を増やし、時間外労働時間を増加させている。きょうされん（旧共同作業所連絡会）が2006年に実施した調査では、2006年の障害者自立支援法の施行後に休暇に数を減らした施設・事業所は全体の31.6%になり、検討中を含めると、39.1%となり、約4割が施行後に休日を減らさざるを得ない状況になったことが明らかにされている。これは、報酬単価の引き下げ、報酬の日払い方式の導入により、施設・事業所の収入は大幅に減少したことが背景となっている。これにより土曜日に開所せざるを得ない施設・事業所が増加し、従事者の休日出勤を増加させている<sup>7)</sup>。これらの労働環境を背景に考えると、問題解決のための相談、気分転換をおこなう時間的余裕が障害者福祉現場の従事者は少なくなっていることが想定され、障害者福祉従事者におけるコーピングのひとつの特徴として表れていると考えることができる。

また、看護師をはじめとして他の対人援助職と比べて障害者福祉従事者の特徴的なコーピングとしては、施設利用者への相談が挙げられる。コーピングの自由記述では「利用者の相談を聞く」など、困ったときに利用者と向き合うという記述がいくつかみられた。社会福祉施設職員のコーピング研究をおこなった鎌田・朝木(2005)の研究においても同様にストレスを解消するために「入居者と話す」、「利用者と遊ぶ」といった項目が報告され、この項目が社会福祉施設職員の特有のコーピングを反映している可能性を指摘している。とりわけ今回の調査の対象であるきょうせん団体は、長年に渡って、施設利用者を「仲間」と呼び、従事者と障害者が一体となる実践観を形成してきた<sup>8)</sup>。この実践観がストレス対処にも影響していると考えることができる。こういったストレス対処がどれほど有効なものかは、今回の調査結果からは明らかにすることができないが、社会福祉従事者の重要なストレス対処のひとつとなっていることは指摘できよう。

## 2. 年代と職階にみるコーピングの違い

問題解決のための相談と気分転換の職階差をみてみると、まず、50代以上は、問題解決のための相談も気分転換も他の年代に比べて低く、一方で20代では高い値を示した。職階差では管理職は比較的良好に問題解決の相談はおこなっていたが、気分転換の値は低く、気分転換に関しては、管理職でない場合のほうが高い値をとっていた。障害者福祉現場では、非常勤職員も多く年齢が上がるにつれて職階が上がる傾向は、他職種に比べてあまりないが、Ⅲ-2でみたメンタルヘルスの不全状態と同じように、コーピングに関しても50代と管理職、20代と管理職で

ない従事者では同じような傾向がみられた。特に50代は、発想転換がとりわけ高く、他の対処の値は低かった。これについては、コーピングの年代差について検討している長谷川(2008)の研究でも、同じように高齢群で「Planful Problem Solving」というストレス対処のみが高い値をとったとしている。これに対して長谷川は「若い頃は様々なストレス・コーピングが用いられるものの、年齢を重ねて試行錯誤を繰り返す中で、有効でなかった、あるいは自分に合わなかった対処方法が、そぎ落とされている可能性と、若いころは様々な対処方法が用いられているにもかかわらず、年齢とともに、使い慣れたコーピングのみが固定化され、他の方法が浮かびにくくなっているという可能性<sup>9)</sup>」の2つの可能性を指摘している。障害者福祉従事者においても同じように、長年の勤務によって福祉の現場だからこそ受けるストレスとそれへの対処が固定化されていることが想定される。今回は発想転換が固定化された対処法になっていたが、今後、社会福祉従事者特有のメンタルヘルスを明らかにしていくためにさらに詳しく検討していくことが必要となる。

## 3. コーピングプロセスの仮説的検討

量的結果と質的結果の分析から年代・職階に注目して、コーピング尺度間の関係性を考察し、コーピングプロセスを仮説的に図式化することを試みた。この図式化は量的調査から年代・職階別に特徴的にみられるコーピングを見出し、M-GTAを参考にしてコーピング尺度間の関係性を分析することで可能となった。

まず、Fig. 8に示すように年代差では、20代、30代は大きく他人に相談するというコーピングと気分転換というコーピングを選択する傾向が

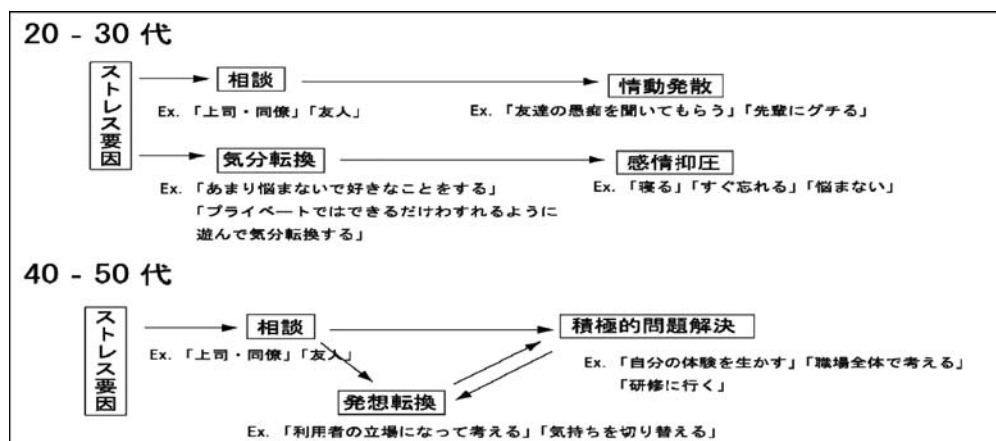


Fig. 8 コーピングプロセスの年代差

あるが、これらは直接ストレスの要因となっている問題を解決するというよりも、情動発散や感情抑圧に繋げているのではないかと考えられた。情動発散や感情抑圧といったコーピングは、Lazarus & Folkman (1984) のコーピング分類では情動焦点型に分けられるが、情動対処型のコーピングは精神的健康に対して否定的な結果になることが、多くの研究で報告されている。今回の調査で、20代、30代の精神的健康度が悪かったことを考えると、図のようなプロセスをたどっているのではないかと考えられた。

一方で、40-50代は、Fig. 8 のように若い世代に加えてシンプルなコーピングのプロセスを辿るのではないかと考えられた。特に50代は、精神健康度も高く、またコーピングでは発想転換をとりわけおこなっていることが特徴的にみられた。この発想転換は、加藤 (2008) が、Lazarus & Folkman (1984) のコーピング分類である問題焦点型と情動焦点型に加えて用いている「解決先送りコーピング」にあたる可以考虑することができる。さらに加藤は、独自のコーピング尺度を用いた研究によって、「解決先送りコーピングは、単に、問題から逃れるような回

避的なコーピング方略ではなく、ストレス反応を低下させ、適応的な状態を維持する特別な機能を有する方略のようである。」<sup>10)</sup> と述べ、解決先送りコーピングがストレスを軽減し、精神的健康に有効であるとしている。今回おこなった自由記述分析では、40代、50代は発想転換の記述だけでなく、積極的問題解決の記述も多くみられた。即座に問題を解決しようとするのではなく、発想転換によって、一度冷静になることで、強いストレスを感じることなく、問題解決にあたれていると考える。

次に職階差にみるコーピングプロセスの仮説的作図を Fig.9 に示す。ここでは、中間管理職と管理職の差をみとめる。職階差においても年代差と同じように、管理職の方がよりシンプルなプロセスを辿ることが想定された。職階差で注目されるのは、特に中間管理職が、様々なコーピングを選択しながらも、最終的には積極的問題解決に辿りつくのではないかとこの点である。この理由としては、中間管理職のコーピングの自由記述では、職員での話し合いや労働組合などで問題を取り上げるといった記述が多くみられた。量的結果では、中間管理職は感情抑

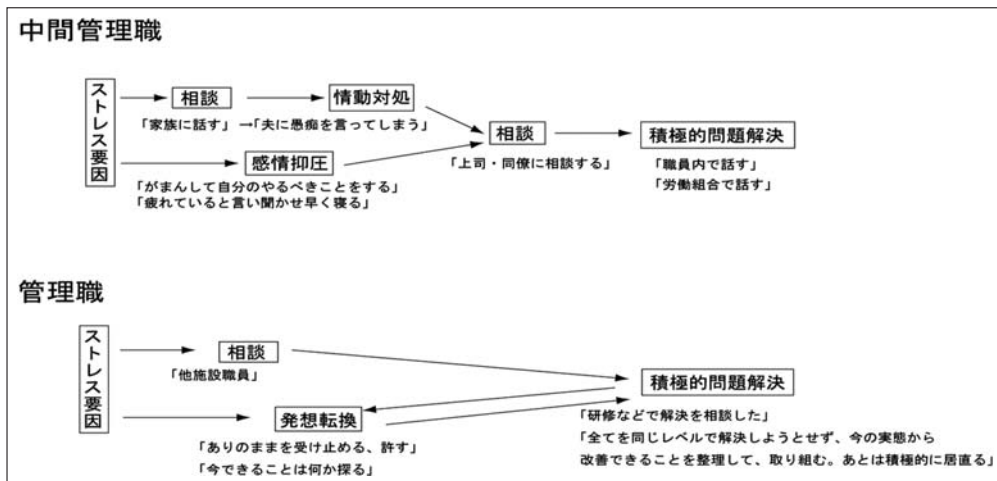


Fig. 9 コーピングプロセスの職階差

圧や情動対処が高い値を示していたが、これらは管理職と管理職でない従事者の狭間での特性と考えられる。しかし、そのストレスの多い職階でも、職場の職員集団の中で解決を図ろうとすることでストレス軽減、ストレス要因の解決に有効に結び付けていると考えることができる。

### おわりに

今回、障害者福祉従事者のメンタルヘルスの基礎的研究として、従事者のストレス・コーピングに注目し、BSCPによる量的分析と自由記述による質的分析の両面から、職階差と年代差に焦点を当てて考察した。現在、障害者福祉現場は、職員の非常勤化が進み、年代が上がるにつれて、職階が上がるという関係性は、失われつつある。このような障害者福祉現場そのものの労働環境の変更は、年代差や職階差だけでなく、より複雑な要因によって職員同士の連携を困難にし、メンタルヘルスに直接的に影響を与えているといつてよいだろう。

近年の障害者福祉現場の労働環境の変化は、ケア労働そのものの商品化が急速に進んだことによって従事者の労働条件が悪化を生みだしている。今回おこなった調査をはじめとしてケアの担い手である従事者に焦点を当てた研究が大いに展開される必要がある。そのため今後は、今回の量的調査の結果を踏まえた上で、従事者に対して直接インタビューを実施し、より詳細に福祉従事者のコーピングおよびメンタルヘルスを分析する予定である。

### 付記

本稿は2011年3月、佛教大学で開催された2010年度関西社会福祉学会年次大会において「自由記述にみる障害者福祉従事者のストレス・コーピング—年代差・職階差に注目して—」として発表した内容をもとにした。

### 謝辞

本調査にご協力いただいたNPO 法人大阪障害者センター「福祉現場におけるメンタルヘルス検討会」のメンバーの方々をはじめとして、大阪・京都きょうされん加盟団体の関係者の皆様方に深く感謝いたします。また、本稿執筆にあたっては同法人

「障害者生活支援システム研究会」の研究者の先生方にご指導とアドバイスをいただきましたことにお礼申し上げます。

## 注

- 1) 全国社会福祉協議会「社会福祉施設の人材確保・育成に関する調査 報告書」2008年
- 2) 峰島厚・山本耕平・大岡由佳・北垣智基・深谷弘和「障害者施設職員のメンタルヘルス調査報告書—約1200人の職務・精神健康度調査から—」NPO 法人大阪障害者センター福祉現場のメンタルヘルス検討会 2011年3月
- 3) 田尾（1984）は「これは、アメリカ合衆国における公民権運動など社会的ニーズの高まりと、それへの制度施策の対応が1960年代の後半であることを合せて考えると、その時期以降ヒューマン・サービス従事者が非常に勢いで増大したこと、彼らの職業病というべきバーンアウトが社会問題化したことの間には不可分の関係が想定される。」と述べている。
- 4) 落合は学校現場と精神科病棟でのフィールドワークを実施するにあたって、国内外の教師と精神科看護師のバーンアウトに関する先行研究を整理している。それによればわが国の教師のバーンアウト研究は1970年代にはじまり、大きく3つのグループによって牽引されてきているとしている。一方で、精神科看護師のバーンアウト研究の数は教師の研究よりも多く、稲岡と久保・田尾によって牽引されているとしている。
- 5) Lazarus, R.S.& Folkman, S. (1984) Stress apperaisal and coping. Springer Publishing Company. (本明寛・春木豊・織田正美監訳 (1991) ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究—。実務教育出版) p.143
- 6) 久保・田尾（1996）は看護師のバーンアウト研究を整理する中で、Ceslowitz (1989) や Leiter (1991) などの研究からコーピングがバーンアウトを軽減する効果があることを指摘している。また、強度のストレスの元におかれた看護師にとってのコーピング行動は仕事の関わり方そのものであるといっても過言ではないと

述べている。

- 7) また、同調査では、職場で以前よりも強いストレスを感じるとする人は63.4%で、その理由としては、仕事量の増加（61.8%）、サービス残業の増加（24.6%）、利用者と話す機会減った（22.0%）、休日の出勤が増えた（21.9%）が挙げられている。
- 8) 共同作業所運動の先駆けである「ゆたか作業所」の秦（1982）は、職員集団の雰囲気や「作業所内では、障害者の働く権利の保障をめざして、作業所の主人公は仲間たちだと、『知恵おくれ』の仲間の限りない発達の可能性を確信しながら、仲間のめざましい日々の変化発達に共感し、励まされながら共に育ち合う関係を築いてきたのである。」(p.255)と述べている。
- 9) 長谷川恵美子（2008）「ストレス・コーピングの年代差およびその精神的健康度に及ぼす影響」（聖学院大学論業 第21巻 第3号）p.269
- 10) 加藤司（2008）『対人ストレスコーピングハンドブック 人間関係のストレスにどう立ち向かうか』ナカニシヤ出版 p.83

## 文献

- 秦安雄（1982）『障害者の発達と労働』ミネルヴァ福祉選書
- Freudenberger, H.J. (1974) Staff burnout. Journal of Social Issues, 30 (1), pp.159-165
- 藤野好美（2001）「社会福祉従事者のバーンアウトとストレスについての研究」（日本社会福祉学会『社会福祉学』第42巻, 第1号）137-149頁
- 福西勇夫（1990）「日本語版 General Health Questionnaire (GHQ) の cut-off point」（『心理臨床』第3巻 第3号）175-182頁
- 長谷川恵美子（2008）「ストレス・コーピングの年代差およびその精神的健康度に及ぼす影響」（聖学院大学論業 第21巻, 第3号）263-271頁
- 井上泰司（2010）「福祉労働をより安定的なものとしていくために：障害者生活支援システム研究会」（『どうつくる？障害者総合福祉法 権利保障制度確立への提言』かがわ出版）132-140頁
- 影山隆之・小林敏生・河島美枝子・金丸由希子



- (2004)「勤労者のためのコーピング特性簡易尺度 (BSCP) の開発: 信頼性・妥当性についての基礎的検討」(産業衛生雑誌46号) 103-114頁
- 鎌田大輔・朝木永 (2006)「社会福祉施設職員のストレス・コーピングに関する基礎的研究—KJ法のよる自由記述の分類および看護師のコーピングとの比較—」(福祉心理学研究 第3巻 第1号) 53-63頁
- 加藤司 (2008)『対人ストレスコーピングハンドブック 人間関係のストレスにどう立ち向かうか』ナカニシヤ出版
- 木下康仁 (2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い』弘文堂
- きょうされん (2006)「障害者自立支援法の施行に伴う影響調査」
- Lazarus, R.S., & Folkman, S. (1984) Stress, appraisal, and coping. Springer Publishing Company. (本明寛・春木豊・織田正美監訳 (1991) ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究—. 実務教育出版)
- Maslach, C., Jackson, S.E. The measurement of experienced burnout. Journal of Occupational Behavior, 2, 99-103
- 落合美貴子 (2003)「教師バーンアウト研究の展望」(日本教育心理学会『教育心理学研究』第51巻, 第3号) 351-364頁
- 落合美貴子 (2008)『バーンアウトのエスノグラフィ』ミネルヴァ書房
- 大岡由佳・山本耕平・峰島厚・加藤寛 (2010)「障害者福祉現場の職員が遭遇する出来事とメンタルヘルス」(『心的トラウマ研究』第6号) 41-52頁
- 清水隆則・田辺毅彦・西尾祐悟編 (2002)『ソーシャルワーカーにおけるバーンアウト~その実態と対応策~』中央法規
- 田尾雅夫 (1987)「ヒューマン・サービスにおけるバーンアウトの理論と測定」(京都府立大学学術報告『人文』39号) 99-112頁
- 田尾雅夫・久保真人 (1996)『バーンアウトの理論と実際—心理学的アプローチ—』誠信書房
- 植戸貴子 (2000)「社会福祉施設職員のストレスとその対応—施設現場の現状・問題点および今後の課題—」(相川書房『ソーシャルワーク研究』第26巻, 第3号) 62-67頁



Fundamental Study of Mental Health in Workplaces Providing  
Welfare for People with Disabilities :  
Focusing on stress-coping by generation and classification gap of job

FUKAYA Hirokazu \*

YAMAMOTO Kohei \*\*

OOKA Yuuka \*\*\*

MINESHIMA Atsushi \*\*

**Abstract:** To date, although many surveys and studies have been conducted on mental health in the workplace, very few surveys and studies have focused on mental health in settings involving welfare for people with disabilities. In this study, a questionnaire survey was conducted targeting welfare staff in workplaces providing welfare for people with disabilities, and a total of 1173 responses (response rate 52.9%) were obtained. This paper analyzes stress-coping by focusing on generation and classification gap using both quantitative and qualitative methods of analysis. Statistical results from the BSCP (Brief Scales for Coping Profile) which measures stress-coping show that significant differences exist in both generation and job classification gap. The study shows that young workers tend to adopt various coping strategies, while older workers tend to adopt only one coping strategy. Secondly the analysis of open responses to the questionnaire in which respondents described their stress-coping techniques shows the same differences in the coping strategies by generation and job classification gap, and supports the hypothesis that older workers and managers undergo a simpler stress-adaptation process than younger workers. The hypothesis requires further validation by conducting an interview survey of staff in workplaces providing welfare for people with disabilities.

**Keywords:** Stress, Stress-coping, Welfare for People with Disabilities, Mental Health, Welfare Labor

---

\* Graduate Student, Master's course of the Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University

\*\* Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University

\*\*\* Assistant Lecturer, School of Letters, Department of Psychology and Social Welfare, Mukogawa Women's University